

原著論文

オーストリアアルプスにおけるスキーリゾート発展プロセス —チロル州イシュグルの事例—

呉羽 正昭*

Development Processes of Ski Resorts in the Austrian Alps —A Case Study of Ischgl in Tyrol—

Masaaki KUREHA*

Abstract

This study examines the developmental processes of ski resorts in the Austrian Alps, where some ski resorts have continuously developed. The development processes of Ischgl in Tyrol are analyzed by changes of facilities in the ski field and the resort town. Ischgl has a short history compared to the historical Austrian ski resorts, such as Kitzbühel and Sankt Anton am Arlberg. By connecting the ski runs with Samnaun (Switzerland), the ski field has been enlarged and the elevation has reached 2,875 meters above sea level. The ski field facilities have frequently been renovated for the comfort of the skiers. The resort town has increased its numbers of luxury hotels, après ski pubs, and sports shops. Ischgl's continuous development relates to its increasing identity as a typical resort of après ski and music concerts. However, its enriched facilities in the large ski field with a reliable snow cover have been more important to these developments.

Keywords : ski resort, development, Ischgl, ski field, après ski, Austria

1. はじめに

周知の通り、日本のスキーリゾートでは長期的な衰退・停滞がみられる¹⁾。1990年前後には多くのスキー人口が存在し、週末にはスキー場のみならず、宿泊施設や高速道路が混雑していた。しかし、バブル経済崩壊と時期を同じくして、スキー人口が激減すると、スキー場経営会社（リフト会社）の財務状況が悪化し、多くの場合経営の変更を迫られた。さらには閉鎖・休業されるスキー場数（479（2012年））が、開発された全スキー場数（763）の40%近くに達している²⁾。近年では外国人スキーヤーの増加によって、北海道ニセコ地域や長野県白馬村、野沢温泉村など一部のスキーリゾートではスキーヤーの継続的な訪問がある程度みられるものの、スキーリゾートという地域に目を向けると景観悪化や社会的問題などが生じている³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。

一方、ヨーロッパアルプスでは、スイスを除いてスキー場利用者数はある程度維持されている⁷⁾。なかでもオーストリアでは、相対的に標高が低いという条件下で地球温暖化への対応が他のアルプス諸国と比べて不利⁸⁾という課題もありながら、2000年頃以降も一部のスキーリゾートで継続的な発展がみられる⁹⁾。

オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの継続的な発展プロセスの要因は、全体としては次のようにまとめられる⁹⁾。すなわち、スイスやフランスに比べて山岳規模は劣るものの、スキー場間をゴンドラリフトで結んだり、シャトルバスを運行させたりして「横のつながり」でスキー場を大規模化してきたこと¹⁰⁾、宿泊施設の高級化やスキーリフトの更新が進んでいること、比較的安価であることなどを通じてスキーリゾートとしての魅力が増し、長期滞在するために繰り返し訪問する外国人を惹きつけているのである。加えて、

原稿受付日 2018年8月20日 原稿受理日 2018年11月12日

* 筑波大学生命環境系 〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1

* Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba 1-1-1, Tennodai, Tsukuba-shi, Ibaraki, Japan (305-8572)

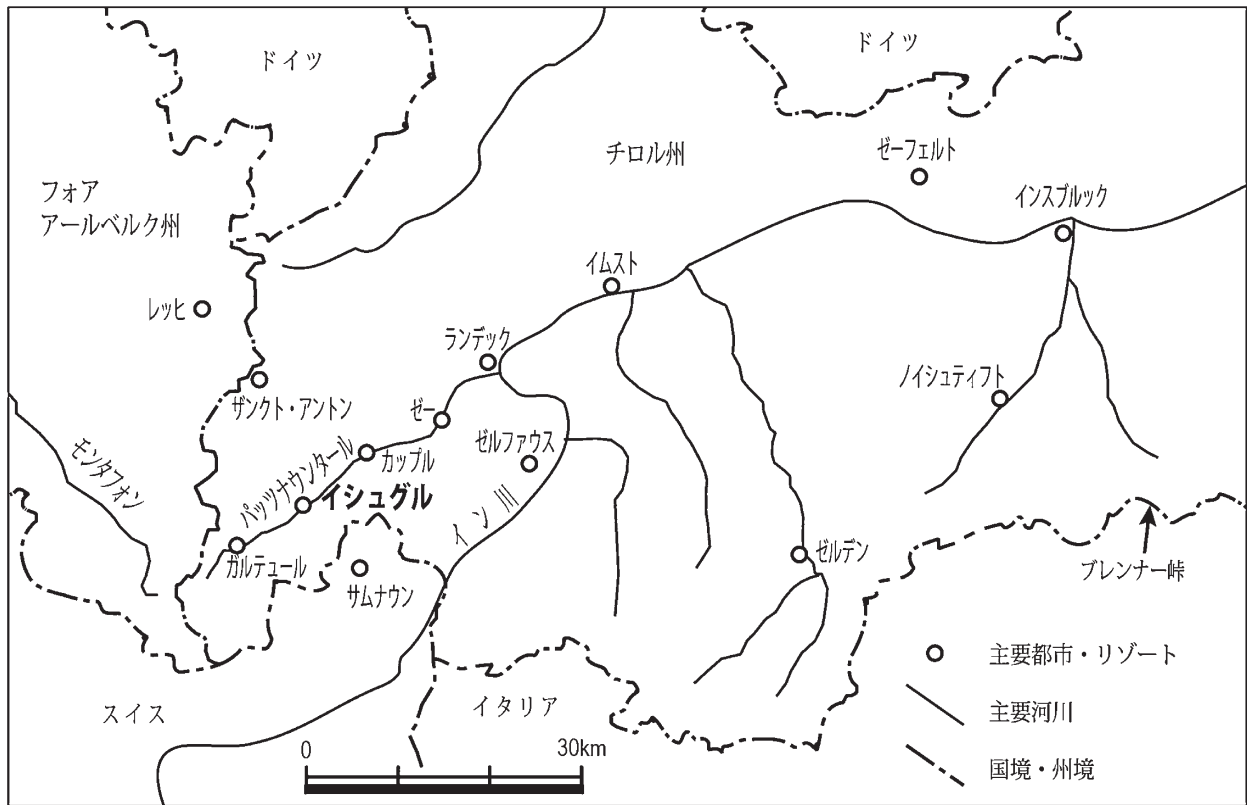


Fig. 1 Study area: Location of Ischgl

図1 研究対象地域：イシュグルの位置

個々のスキーリゾートにおいて、特定の出発国からのスキーヤーの滞在が卓越する点も指摘されている。つまり、スキーヤーを訪問させる魅力を高めるためには、スキーリゾート個々による独自の目的地としてのイメージ創造が関係していると考えられる。

それゆえに、個々のスキーリゾートについての詳細な分析を通じて共通点や相違点の整理がなされることによって、スキーリゾートの発展プロセスの本質的な特徴を示すことが可能となる。たとえば、チロル州エッツタールÖtztalのゼルデンSöldenに関する分析では、氷河スキー場の冬季利用開始によってその大規模化が図られたこと、快適に過ごすことのできる比較的高級な宿泊施設が増加していること、飲食店・スポーツ店の新規立地が進んでいることなどが、近年の発展プロセスにおける重要な要素として指摘された¹⁾。とりわけ、氷河スキー場の存在に基づく積雪の確実性がゼルデンのイメージにおける重要な柱になっている。

そこで本研究では、個別のスキーリゾートの発展プロセスにみられる特徴と発展要因を解明することに課題を定める。オーストリアアルプスにおいて2000年頃以降も発展傾向が顕著であるスキーリゾートとしては、上記ゼルデンのほかに、サールバッハ・ヒンター

グレムSaalbach-Hinterglemm、イシュグルIschgl、ザンクト・アントンSankt Anton am Arlberg、マイヤーホーフエンMayrhofen、ゼルファウスSerfaus、オーバータウエルンObertauernなどをあげることができる¹⁾。本研究では、このうちイシュグルを取りあげる。イシュグルは、スキー場開発の開始は遅れたものの、飲食施設やゲレンデコンサート開催を通じたイメージ創造に基づいて発展傾向が顕著にみられる事例である。

本研究の目的は、スキーリゾートであるイシュグルの発展プロセスにみられる特徴を明らかにするとともに、発展に関わる地域的な要因を解明することである。発展プロセスについては、まずスキー場の拡大や施設の拡充について分析する。次いで、統計資料と土地利用調査に基づいて、宿泊数や宿泊施設数の変化のみならず、その規模や商業施設も含めた景観変化に注目した分析を加える。さらに、スキーリゾートとしての魅力を高めるためのイメージ創造戦略、スキーヤーの評価にも注目していく。

研究対象地域のイシュグル（リゾートタウンの標高1,376m）はチロル州南西部の河谷、パッツナウンターPaznauntal内に位置する（図1）。イシュグルは、同名のゲマインデ（基礎自治体；人口1,580（2016年））

の中心地区でもある。本稿の分析で使用する多くの統計はゲマインデが単位であるが（その都度その旨を記述する）、基本的にはイシュグル地区をイシュグルと表記して分析する。

2. スキーリゾート・イシュグルの概要

チロル州の他地域と比べて、イシュグルのスキーリゾートとしての発展はかなり遅れた。イシュグルは、もともと13世紀頃にピークに達した、スイスからのヴァレー移民などによって形成された山地農村であった¹¹⁾。19世紀末になると、登山基地として開発が徐々に開始されたが、その名声はパッツナウンター最奥部のガルテュールGaltürの方が高かった。当時のドイツ・オーストリア山岳会によってイシュグル近隣の山岳地域に複数の山小屋が整備された。やや遅れて、スキー登山基地としてもある程度知名度を高めた。イシュグルにスキー学校が設立された1929年には、5軒の宿泊施設が存在していた¹²⁾。

1954年には、ガルテュールを経てフォアアールベルク州のモンタフォンMontafon（図1）に至るジルフレッタ山岳道路Silvretta-Hochalpenstraßeが開通すると、袋小路であったパッツナウンターの交通条件は大きく改善された。交通条件の改善とともにリゾートしての基盤ができたものの、イシュグルに最初の索道（ロープウェイ50人乗り；現在のジルフレッタ索道）が完成したのは1963年12月のことであった。しかし、その後はスキー場の開発が順調に進み、1978年には山岳の国境を挟んで隣接するサムナウンSamnaun（スイス）とスキーリフトで連結されて大規模化した。

スキー場開発の進展とともに、イシュグルの土地利用・景観や経済活動は一変した。また、後述するようにアプレスキー（アフタースキー）¹³⁾施設の充実、ゲレンデ・コンサートの聖地としての名声獲得などで高く評価されている。その結果、多くのさまざまな宿泊施設や飲食・商業施設などを有する、オーストリアを代表するスキーリゾートへと成長した。競技スキーの著名な大会等はほとんど開催されないために世界的知名度はやや低いが、ヨーロッパ内のレクリエーションスキーヤーの間では、かなりの知名度がある。2017/18シーズン向けのヨーロッパのスキー場ガイド¹⁴⁾によれば、イシュグルはスキー場およびアプレスキーに関する評価とともにそのベスト5に入っている。

3. イシュグルの発展傾向

3.1 スキー場拡大と施設の更新

スキー場経営会社であるジルフレッタ索道株式会社Silvrettaseilbahn AGは、地元の人々73名の出資によって1961年に設立された。その2年後、先述のように最初の索道が完成した。当初はジルフレッタ索道の終点付近のイドアルプIdalpに、複数のシュレップリフトが整備された（図2）。

1970年代の後半、サムナウンの索道会社Bergbahnen Samnaun AGと連携して新たなスキーリフトを設置し、国境（図3(a)）を跨いだ2つのスキー場を連結させた。また、イシュグルについてもそのゲレンデは南部へと拡大していった。ただし、1980年代末まではシュレップリフトが多くを占めていた（図2）。

1990年代の後半になると、索道設備の更新が活発化した。すなわち輸送能力のより高い索道へと更新され、ゲレンデもさらに南部へと拡大した。こうした更新が継続的な投資によってなされ、輸送人員規模は右肩上がりに増えている。たとえば、時間あたりの輸送人員が3000人を超える大型のゴンドラリフト（パルダッチェグラート索道、28人乗り；図3(b)）、ヒーター付きの8人乗りチェリフトなど、最新で輸送能力の高いリフトが毎年のように導入され、スキーヤーはより快適にスキー場で過ごすことができるようになってきている。イシュグルとサムナウンをあわせてジルフレッタアリーナSilvretta Arenaの名称付けがなされ、2017年現在、スキーリフト45基、その輸送人員9.3万人/h、コース面積515ha（標高1,377m - 2,872m）、総コース延長238km、最長滑降コース11kmに達する（図3(c)(d)）。

スキー場の大規模化が順調に進むとともに、スキーリフトのみならず、その駅舎やレストランの更新が盛んになされている。ゴンドラリフトの更新時には、その山麓駅舎がスキーロッカー（図3(e)）やスキーレンタル店を備え、エスカレーター（図3(f)）付きのモダンで利便性の高い建築物となっている。

最近頻繁に生じている積雪の不安定な状況をうけて、貯水池等も含めて人工降雪機の整備が継続的になされており、人工降雪機の数1,100（イシュグルのみ、2018年）に達するようになってきている。スキーコースの多くは地形改変され、冬季には圧雪された斜面で快適な滑降が可能となっている。もちろん、圧雪車で整備されないコースも残されており、多様なコースが提供されている。

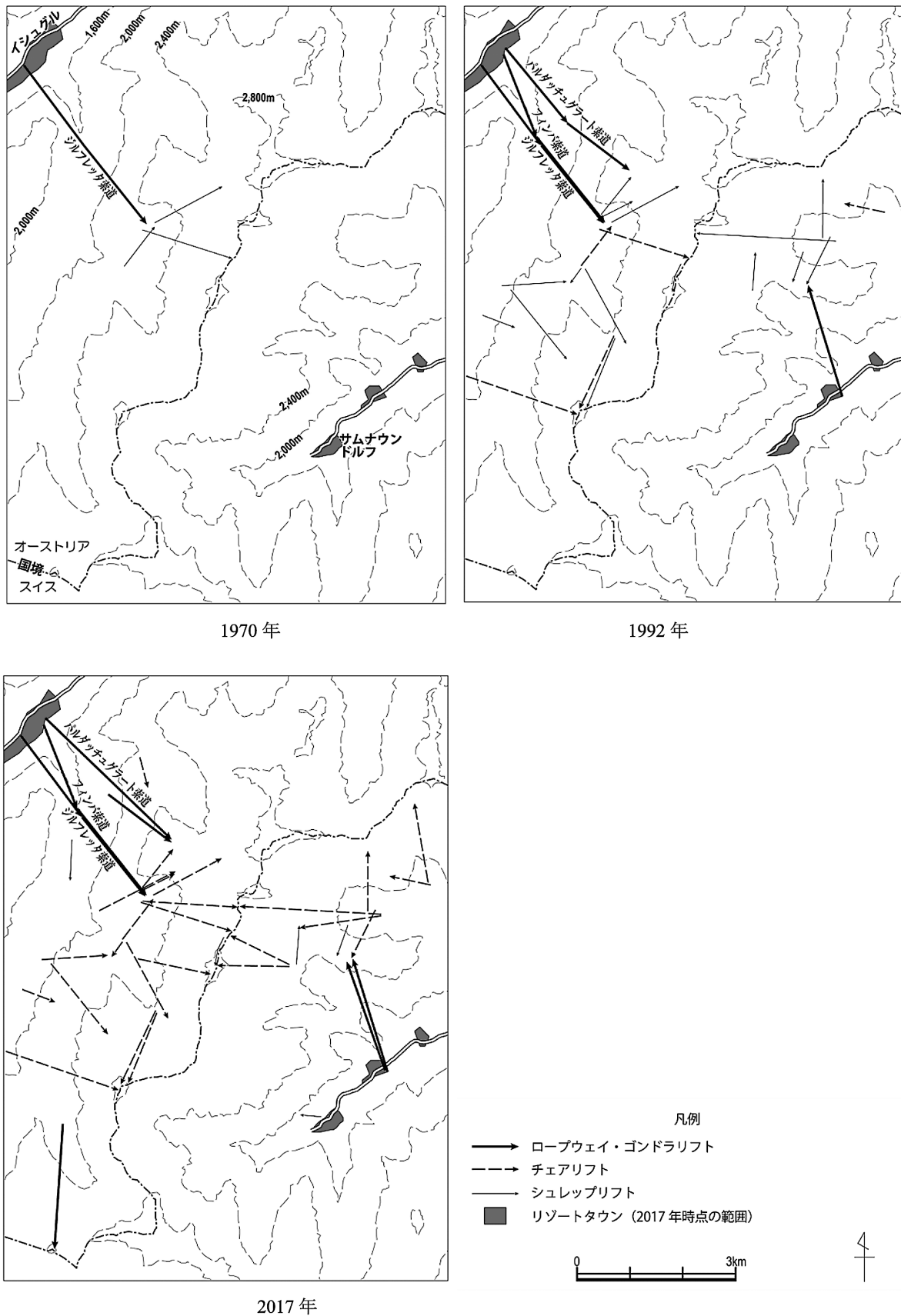


Fig. 2 Spatial development of ski field in Ischgl 図2 イシュグルのスキー場における索道の空間的拡大
 資料：Silvrettaseilbahn AG: 50 Jahre Silvrettaseilbahn AG および Tourismusverband Paznauntal-Ischgl のパンフレット



(a) スイスとの国境に位置する掲示板



(b) パルダッチュグラート索道山麓駅



(c) スキー場北東部



(d) スキー場南西部



(e) パルダッチュグラート索道山麓駅内のスキーロッカー



(f) パルダッチュグラート索道山麓駅内のエスカレーター

Fig. 3 Ski slope and facilities of gondola lift station in Ischgl

図3 イシュグルスキー場内の景観（2017年2月筆者撮影）

3.2 来訪者の変化

イシュグル（ゲマインデ全体）への宿泊者は、1960年代にはおよそ5-6千人がそれぞれ10泊程度していたにすぎなかった（図4）。1970年代前半に増加がみられ

るようになると、それ以降は冬半期宿泊数（表記年前年11月から4月）が20世紀末までほぼ一貫して増加してきた。2000年代になると増加傾向は収まるものの、冬半期宿泊数は平均としては微増を続け、2010年代に

は130万泊を超えている。また、イシュグルでは、オーストリアアルプスの多くのリゾートで夏季ツーリズムもある程度の重要性をもつ特徴とは異なって、冬季の重要性が著しく大きい。2017年の冬半期宿泊数の割合は年全体の92%に達する。このように、宿泊数の増加が継続的にみられる一方で、平均宿泊数（宿泊数÷到着者数）は一貫して減少している。近年では冬季のその値が5泊を割り込んでおり、滞在の期間の縮小が生じている。

伝統的にイシュグルにおける宿泊者のほとんどは、ドイツ人であった。1970年代にはその割合は80%前後に達しており、その後はやや減少傾向がみられたが、1990年代後半は70%台を推移していた。21世紀に入ると、ドイツ人の宿泊数は実数でも割合でも減少しているが、最近10年間は50%（約70万泊）前後で停滞傾向にある（図5）。それに対して、宿泊数の規模はドイツには劣るものの、オランダとスイスからの宿泊数の割合が増加し、ベルギーとイギリスも同様の傾向を示す。一方、2000年代半ば以降に目立っているのはその他諸国からの増加である。その多くを占めるのはロシア、ポーランド、チェコなどの東欧諸国であり、彼らによるイシュグルの評価が高まっていると考えられる。

3.2 宿泊施設の立地

イシュグルの集落景観は、基本的に谷底に位置する小規模な農村であった。1947年の空中写真によると、現在も中心部に位置する教会を中心としたイシュグルの原農業集落があり、その700mほど南西に2つの小村Weilerが存在していたにすぎない。1951年の人口もわずか817であった。

1963年の索道経営開始とともに、宿泊施設が徐々に増えていった。1970年前後で1500ベッド、その3分の1は小規模宿泊施設（ベッド数10以下）であった（オーストリア統計局）。1979年で139施設、3346ベッドに達していた¹⁵⁾。空間的な分布パターンとしては、旧来の中心集落に多いこと、さらにはジルフレッタ索道の山麓駅付近に多いことがわかる（図6）。

1980年代に入っても宿泊施設数は順調に増加し、また規模も拡大していった。イシュグル観光協会が1992年に刊行した宿泊施設リストによれば、194施設（5787ベッド）が存在した。1979年時点と比べると、その分布域、すなわち中心部とゴンドラリフトの山麓駅付近の外側に広がって立地するようになった（図6）。またバルダッチュグラート索道が1990年に架設されると、

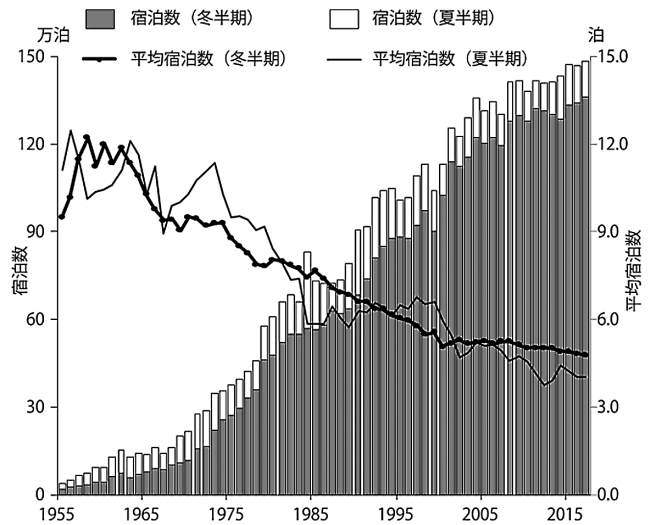


Fig. 4 Changes in nights spent in Gemeinde Ischgl
 図4 イシュグル（ゲマインデ）における宿泊数の推移（1955-2017年）

資料：Statistik Austria：Tourismus in Österreich（各年版）

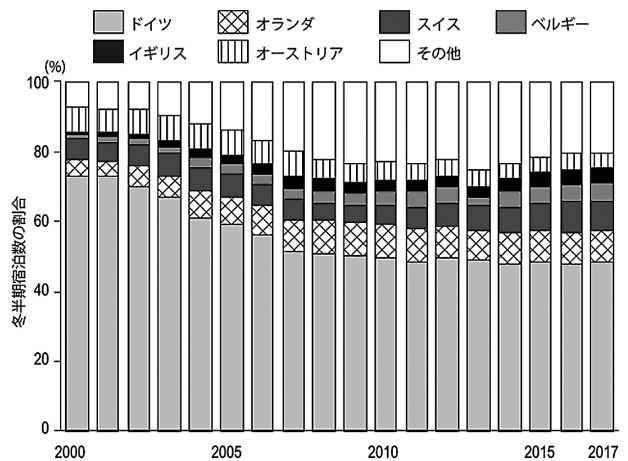


Fig. 5 Percentage changes in nights spent in winter half year by countries of origin in Gemeinde Ischgl
 図5 イシュグル（ゲマインデ）における出発国別冬半期宿泊数割合の推移（2000-2017年）

資料：Amt der Tiroler Landesregierung：Der Tourismus in Winter（各年版）

その周囲にも宿泊施設の立地がみられる。

1990年代半ば以降も宿泊施設数は増加を続けており、2016年現在で256軒（8835ベッド）となった。空間的には、トリザンナ川の北側やイシュグルの東部といった地区の周辺部に新たな宿泊施設が建設されている（図6）。ゲマインデ全体では、同年に530軒（約11600ベッド）存在し、イシュグルの上流に位置するマトン地区や下流に位置するフェアザール地区にも宿泊施設の立地がみられるようになっている。

イシュグルでは宿泊施設数やそのベッド数が増加しているだけでなく、その施設水準の向上といった質

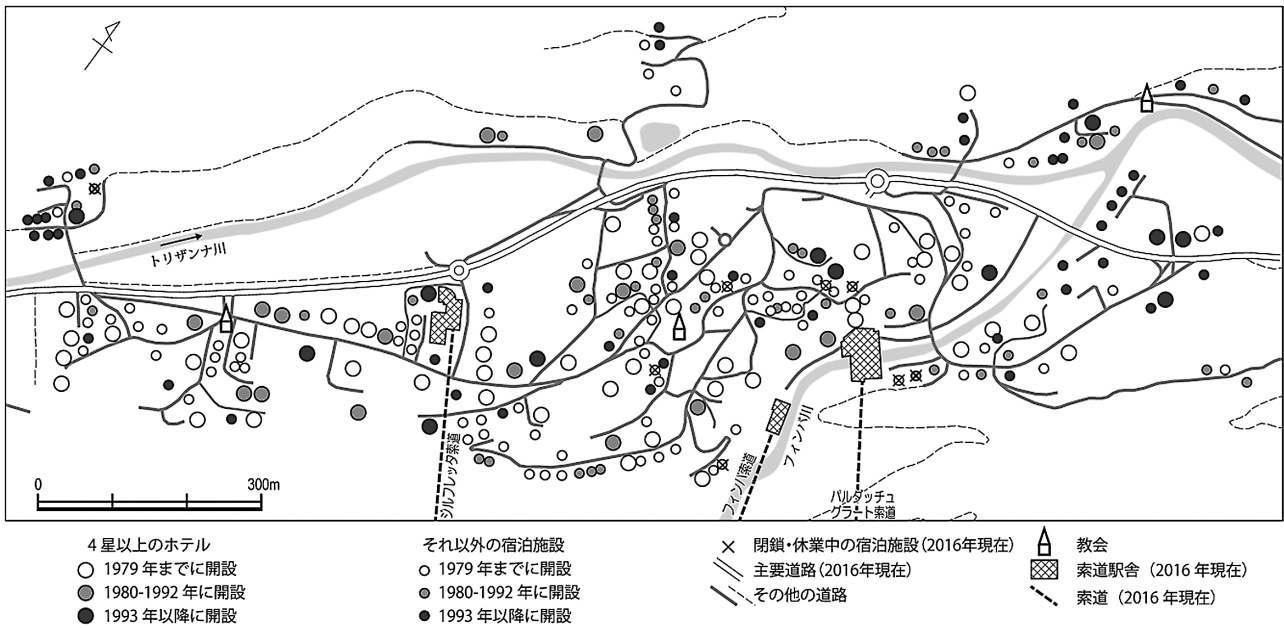


Fig. 6 Spatial development of accommodational facilities in Ischgl 図6 イシュグルにおける宿泊施設の空間的拡大（～2016年）

注：ホテルの区分は2016年のそれに基づく

資料：Perth (1979)¹⁵⁾， Tourismusverband Ischglのパンフレット（1992/93シーズン）および現地調査

的变化が顕著である。具体的には、アパートメント Ferienwohnungの増加とある程度の高級化がみられることである。また、洗練された様式の外観をもつ高層の建物も増えつつあるなど、外観的にも変化が著しい。

アパートメントについては、施設全体がアパートメントである経営（約80軒）がある一方で、ホテルやペンションの一部をアパートメントとして経営する（同じく約80軒）形態もある。アパートメントは、やや安価な価格設定、スペースの広さ、キッチンやリビングルームの設置などがみられるため、普段の暮らしと同様に家族や友人同士でくつろいで過ごすことのできる施設として人気が高い。

ヨーロッパでは宿泊施設に対してそこで提供される設備やサービスの質に基づいて星の数でランク付けがなされている。5星が最も高級であるが、イシュグルでは4星クラスのホテルが多いことが特徴である。5星と4星のホテル数は80に達するが（2016年）、5星ホテルはわずか1軒のみである¹⁶⁾。宿泊施設のカテゴリー別の宿泊数をみると（2017年）、冬半期の約136万泊のうち、5星と4星のホテルでの宿泊数が約58万泊と43%を占める。つまり、これらの施設での規模の大きさが、施設数比よりも宿泊数比の値を大きくさせている。

4星ホテルは、最上級である5星ホテルと比べると、設備的にレストランは無くてもよく（このタイプのホテルはホテルガルニーHotel Garniと呼ばれる）、またそ

他の設備水準は5星ホテル水準に近いものの、全体としては投資やコストの削減になり、宿泊料金も5星ホテルに比べて安い。つまり、宿泊施設立地からみたイシュグルの性格は、至れり尽くせりのサービスが提供される5星ホテルを利用する富裕層が卓越する、オーストリア国内の高級リゾートであるチュルスZürsやレッヒLech、キッツビューエルKitzbühelとはやや性格が異なっていると考えられる。イシュグルでは、高級リゾートほど高価ではないが、それに準ずる程度の施設やサービスを求めたスキーヤーが多く来訪しているのであろう。

3.3 リゾートタウンの機能変化

スキーリゾートの発展とともにリゾートタウンの機能は大きく変化している。既述の宿泊施設の増加やその質的变化のみならず、さまざまな商業施設の立地、アプレスキー施設の増加、インフラ施設整備の進行をみることができる。

教会に隣接する地区中心部およびゴンドラリフト山麓駅付近では、飲食店やスポーツ店、衣料品店、スーパーマーケットなどさまざまな商業施設が立地している（図7）。とくに飲食店の立地数が多い。単体のバーなどのアプレスキー¹³⁾施設（図8(a)）が目立つ点がイシュグルの特徴であるが、ホテルなどの宿泊施設に併設されるもの（図8(b)）もある。イシュグルでは、他の

リゾートに比べてこの種の施設が多くあり、天候次第では屋外でアルコール飲料を嗜んでいる人びとが多い。それゆえにアプ्रेसキーの聖地としてのイメージが創られ、その愛好者が継続的に滞在していると考えられる。ただし、2016年12月から、20時と6時の間、イシュグル中心部の主要道路でスキー靴とストックでの歩行が禁止された。騒音防止や安全確保の観点から導入されたものであるが、スキー滑降後に一度宿泊施設で着替えてからゆっくりと飲酒を楽しむことができるようになった点も評価されている。

スポーツ店は本店を中心部にもち、ゴンドラリフト駅舎付近に支店を有して、スキー場に向かうスキーヤー

が利用しやすくなっている(図7)。一方、衣料品店や食料品店は中心部に立地する。スーパーマーケットには、多くの食材や飲料を購入するために自動車で訪れる利用者が多い。そのためにやや広い駐車場を設けている。

また、リゾートタウン内のリゾートセンターや歩行トンネル、巨大な立体駐車場といったインフラ整備は、訪問者の快適な滞在を可能としている。まず、イベントホール、会議場、屋内プールなどからなるジルフレッタセンターは1986年に開設された¹⁷⁾。それ以降、滞在者の利便性を向上させるさまざまなインフラ施設の整備がなされている。イシュグル中心部ではフィンバ

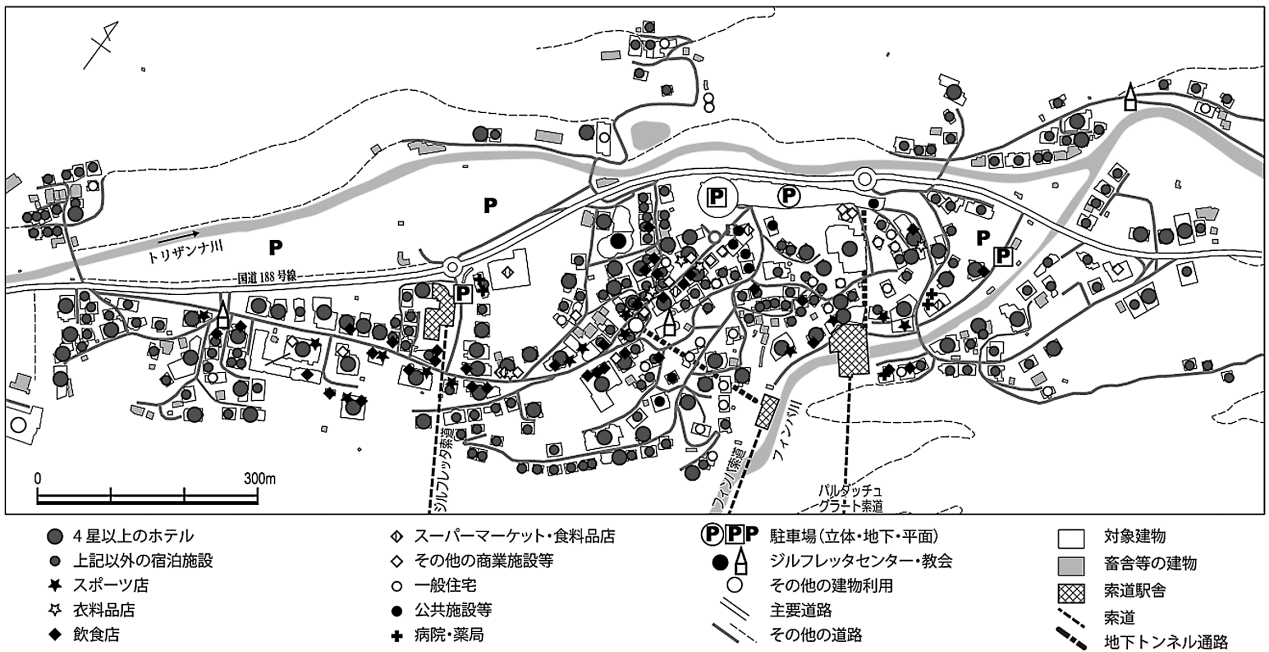


Fig. 7 Use of buildings in Ischgl 図7 イシュグルの建物利用 (2016年)

資料：現地調査



(a) 単体の施設 (2017年2月筆者撮影)



(b) 宿泊施設併設の施設 (2016年2月筆者撮影)

Fig. 8 Après-ski facilities in the central part of Ischgl

図8 イシュグル中心部のアプ्रेसキー施設

川の左岸に比高差10mほどの段丘があり、中心部からフィンバ索道やパルダツチュグラート索道の山麓駅に到達するにはこの坂を登って下るか、北側を大回りして到達する必要があった。それゆえ、1998年、教会の真下を通過してフィンバ索道駅舎へと至る、歩行者用のドルフトンネルDorf Tunnel (図9(a))が整備された(歩行者専用、動く歩道あり)¹⁷⁾。同様に後述する立体駐車場整備と合わせて、そこからパルダツチュグラート索道へ通じる、歩行者専用のプレナートンネルが2015年に完成した。それによって駐車場およびそこに敷設されたバス停からの移動の便が向上した。

イシュグルが狭い谷底に位置するために平坦な土地が不足しており、個々の宿泊施設では増加する訪問者のための駐車場が不足していた。個別に地下駐車場を整備するなどの努力はなされてきたが、除雪作業が軽減される屋内駐車場整備が公的にも取り組まれてきた。1996年にはパルダツチュグラート索道駅舎の北に地下駐車場フロリアン(200台分)が、2002年にはジルフレッタ索道駅の真下に220台分の地下駐車場が整備された¹⁷⁾。さらに、2015年には国道188号線に沿った細長い土地(長さ200m)に600台の立体駐車場パーキングラウンジParking Lounge(高さ20m)(図9(b))が完成した。そのうち450台分は宿泊施設に販売されており、宿泊施設の敷地内や近隣の駐車場に収容しきれない車輛の駐車スペースとなっている。残りの150台分は当日の駐車分である。既述のように、この立体駐車場にはトンネルが併設され、さらに翌年にはゲマインデ役場が建物最上階北端に入居した。

このように、イシュグルでは滞在者の利便性を向上させる施設の整備が進んでいる。また、この点はホテルの質向上やスキー場内の設備更新とも共通している。これらの戦略が、他のスキーリゾートとの差別化を実現するために有効に機能していると考えられる。

パツナウンタールにおけるイシュグルの位置づけも変化している。この河谷内には、下流からゼーSee, カップルKappl, イシュグル, ガルテュールの4つのゲマインデがある(図1)。それぞれがスキー場を有するものの、イシュグルのスキー場規模が拡大し、また多様な面でイメージが向上するにつれて、スキーリゾートとしてのイシュグルの地位は河谷内で上昇している。それゆえ、より安価な宿泊機会を求めてイシュグル以外に滞在し、日帰りでイシュグルを訪問するスキーヤーを生じさせている。スキー場では河谷共通のリフト券が販売されており、そのチケットで乗車できるシャトルバスが頻繁に運行されている。逆に夏季は、4

つのゲマインデ全てでトレッキング客のために索道が運行されている。なかでも河谷最奥部に位置し、トレッキングルートが豊富なガルテュールが最も人気のある目的地となっている。一方、イシュグルでは夏季に閉鎖される宿泊施設もみられる。

4. スキーリゾート発展に関わる諸要因

以上のように、イシュグルはスキーリゾートとして継続的に発展してきた。ここでは、スキーリゾート発展に関わる諸要因について、イメージ戦略と訪問者の評価に着目して考えていく。

4.1 イベントによるイメージ戦略

イシュグルでは1995年以降、イベント、とくに音楽イベントが定期的に開催されている。その前身は1989年にサムナウンと共同で実施したコンサートであった。当時はイベントがイシュグルのツーリズムにおいて重要な位置づけとして認識された時期で、巨大な雪だるま設置、花火大会とならんで音楽イベントなどの開催が模索されていた¹⁸⁾¹⁹⁾。キーパーソンの1人(イシュグルのホテル経営者)によるエルトン・ジョン関係者との交渉が功を奏し、1995年に「Top of the Mountain Concert」として、ゲレンデ内の平坦地イドアルプ(標高約2,300m)(もしくはリゾートタウン内の駐車場)に設置されるステージで行われるようになった(表1)。

その後は、1996年のティナ・ターナー、1999年のポップ・ディランなど1990年代に著名歌手を呼ぶことでコンサートの知名度を向上させている(表1)。2000年代以降は、毎年3回(スキーシーズン開始時、同終了時(春祭り)、イースター期間)のコンサートが定期的に行われ(表1)、2012年のマライア・キャリー招聘などをはかってきた。ファンや観客は、リフト券があれば観覧できる形態となっている。イドアルプでのコンサートでは2.5万人を収容するが、平均して各回2万人程度を集客している。マスコミ関係者の訪問もあるなど、コンサート開催を通じて冬季におけるリゾート滞在者のさらなる増加をもたらしている。なお、初期にはコンサートではなく、ミュージカルやファッションショーを開催したこともある。

イベントは夏季にも積極的に行われている。イシュグルでは、スキー場内に多くのマウンテンバイク走行コースを整備するなど、その振興が盛んになされてきた。これをうけて、マウンテンバイクによるヒルクラ



(a) ドルフトンネル



(b) パーキンググラウンジ

Fig. 9 Main infrastructure for tourism in Ischgl 図9 イシュグル中心部の主要インフラ施設 (2018年2月筆者撮影)

Table 1 Artists at the Top of the Mountain Concert in Ischgl 表1 イシュグルにおけるコンサートと出演アーティスト

年度	シーズン開始			イースター			春祭り		
	月日	アーティスト名	観客数	月日	アーティスト名	観客数	月日	アーティスト名	観客数
1995							4/30	Elton John	
1996							5/1	Tina Turner	
1997							5/1	Diana Ross	
1998							5/2	Bon Jovi	
1999				4/4	Gianna Nannini		5/1	Bob Dylan	
2000	11/27	Latetia Casta					4/30	Rod Stewart	
2001				4/8	Nena		4/30	Sting	
2002				4/7	Brosis		4/30	Enrique Iglesias	
2003	11/30	Ronan Keating	8	4/6	Sugababes	14	5/3	Udo Jürgens	17
2004				4/11	Söhne Mannheims		5/1	Peter Gabriel	15
2005	11/27	The Corrs		3/28	Die Fantastischen Vier	20	4/30	Alanis Morissette	16
2006	11/26	Lionel Richie		4/16	Wir Sind Helden		4/30	Pink	
2007	12/2	Pussy Cat Dolls			Scissor Sisters	20	4/29	Melanie C	12
2008	12/1	Rihanna	20	3/23	Stereophonics	20	5/3	Elton John	22
2009	11/29	Leona Lewis, Gabriella Cilmi and Jenniffer Kae	20	4/13	Marquess	20	5/2	Kylie Minogue	18
2010	11/28	Katy Perry	20	4/4	Sportfreunde Stiller	19.5	5/1	Alicia Keys	15
2011	11/27	Gossip	20	4/24	Culcha Candela	10	4/30	The Killers	15
2012	11/26	Roxette	18	4/8	Tim Bendzko		4/30	Mariah Carey	14
				4/10	Aura Dione	17			
2013	12/1	The Scorpions	13	4/1	Xavas		4/30	Deep Purple	10
2014	11/30	Nickelback	21	4/2	Fettes Brot	13	5/3	Robbie Williams	25
2015	11/29	James Blunt	17	4/5	Jan Delay	18	5/2	Thirty Seconds To Mars	13
2016	11/28	The Beach Boys	15	3/28	Silbermond	23	4/30	Muse	14
2017	11/26	Pur	22	4/16	Andreas Bourani	17.3	4/30	Zucchero	18.2
2018	11/25	Andrea Berg	20	4/1	Max Giesinger	19	4/30	Helene Fischer	26
2019	11/24	Jason Derulo		4/21	Johannes Oerding		4/30	未定	

注：年度は表記年前年から始まるスキーシーズンを示す。観客数の単位は千人（空欄は数値不明）。

資料：https://www.ischgl.com/de/events/winter-highlights/eventueckblick (2018/10/05 最終閲覧)

イムやダウンヒル、ロード走行、それらを組み合わせたカテゴリーが複数設定（最長75km）された、レースイベント「Ischgl Ironbike Festival」が毎年開催されている。2018年8月2-4日に開催された大会では約1000人が参加した。同様にマラソンやバイクのイベントもある。また近年のグルメブームに基づいたイベントもあ

る。山小屋に一流シェフを招聘し、その料理を堪能することにトレッキングを組み合わせたものや、地元産のチーズやハムを販売する市場開催などがある。

パッツナウンタールでは夏季にジルフレッタ・カードSilvretta Cardを発行している。このカードは地域全体の宿泊施設で滞在者に無料配付されるものである。

全ての索道に乗り放題、路線バスへの乗車無料、ビーラーヘーエへのジルフレッタ山岳（有料）道路代無料、プールや博物館への入場無料などの特典があり、利用者にとっては大きなサービスになっている。夏季に行われるこれらのイベントやサービスは、スキーリゾートとしてのイシュグルのイメージ形成にもある程度の役割を果たしていると考えられる。

4.2 スキーヤーの評価

次いで、実際にイシュグルもしくはパツナウンターに滞在したスキーヤーの評価²⁰⁾について述べる。主な活動は約83%がスキーであり、スノーボードは12%にすぎなかった。42%が一週間の滞在であり、26%が3-4泊、11%が5-6泊であった。宿泊施設の予約は62%が電子メールや電話で直接に、17%が施設ホームページでの予約システムを利用していた。

約8割が主にイシュグルのスキー場を利用したと回答しており、パツナウンターにおけるイシュグルスキー場の優位性がうかがえる。さらにその規模や斜面が高く評価されており、それがイシュグルもしくはパツナウンターに滞在する意思決定理由になっている。選択理由を5つまで順位付けで回答した結果、スキー場の規模や斜面を第1位とした回答者が半分を占め、第3位までを含めると約7割に達する。これに次いでアプレスキーの充実が評価されているが、スキー場の規模等の評価に比べると低く、第1位とするものは1割程度にすぎず、第3位までを含めても3割強である。アプレスキーの評価に数値的に近いのは、積雪の可能性である。これらに続いて肯定的に評価されたポイントは、スキーコースの整備、索道の輸送利便性、リゾートの雰囲気、宿泊施設、ナイトライフなどであった。

逆に、イシュグルへの再訪を留まらせる評価としては、価格の上昇がある。そのほかには、東ヨーロッパからのスキーヤーの増加による混雑、アプレスキー施設の多さ、スキーコースの混雑があげられていた。

つまり、スキー場が位置する標高の高さやスキー場内の施設や整備への評価が高くなっている。一方、イシュグルのイメージ創造で重要なアプレスキー施設に対する評価はそれほど高くはない。またコンサートに関しては、アンケート調査項目には含まれていないため評価は不明である。

夏季のイメージ創造についてもさまざまな取り組みがなされているが、回答者の67%が夏季未訪問とされている。今後、夏季のツーリズムの成長戦略を考える

際の課題となるのであろう。

5. おわりに

本研究は、スキーリゾートであるイシュグルの発展プロセスにみられる特徴を明らかにするとともに、発展に関わる地域的な要因を解明してきた。

イシュグルは、オーストリア国内の伝統的なスキーリゾートに比べて遅れて開発が始まったが、宿泊数のほぼ一貫した増加にみられるように現在まで継続して発展してきた。スキー場では規模拡大がなされるとともに、索道施設や人工降雪機、飲食施設の整備が進んでいる。リゾートタウンでは、宿泊施設の質的・量的な拡充がみられるのみならず、飲食施設やスポーツ店などの商業施設の増加がみられる。このような発展傾向は、同じチロル州のスキーリゾートのゼルデン¹⁾やゼルファウス、マイヤーホーフェンなどでも共通している。

一方、イシュグルの独自性形成に貢献しているのは、ひとつにはアプレスキー施設の充実である。また、リゾートタウン内の移動で重要なトンネルや駐車場などのさまざまなインフラ施設の整備によって、訪問者の快適なリゾート滞在が可能になっている。さらに、ゲレンデコンサートの定期的な開催はイシュグルの知名度を向上させている。このような施設整備やイベント開催を継続させてきたリゾート発展戦略が、イシュグルの発展をもたらしてきたとも考えられる。これらの戦略については、イシュグルが後発のスキーリゾートであったゆえに、より積極的な取り組みがなされてきたと考えることもできる。

ただし、イシュグルに滞在したスキーヤーが高く評価している点は、スキー場の規模・設備や積雪の確実性であった。イシュグルのスキー場は最高点が標高2800mを超え、またスキー場としての規模も比較的大きい。ただしこの標高と規模は、オーストリアアルプスの他のスキー場と比べると、群を抜いて高いわけでもなく広いわけでもない⁹⁾。つまり、イシュグルでは、その設備の良さゆえに快適にスキーを楽しむことができる点が評価されており、索道会社などによるこれまでの開発戦略がスキーヤーを惹きつけてきたのであろう。イシュグル独自には、アプレスキーやゲレンデコンサートの聖地といったイメージが重要ではあるものの、スキーリゾートとしての継続的發展に関わる最も重要な要因は、スキー場が有する自然条件としてのポテンシャルをいかした、施設整備やサービス向上であ

ったと考えられる。

イシュゲルの今後の課題としては、減少しつつある平均宿泊数をどのように食い止めるかがある。また、長期的には、地球温暖化が進む中でのスキー場整備の動向、さらには夏季の目的地としてのイメージ戦略などが重要な課題になるであろう。

謝 辞

本研究はJSPS科研費JP15K12797の助成を受けたものである。現地調査ではKurz村長、観光協会の方々、Haimayer博士などから貴重なデータ提供とアドバイスを受けた。また、匿名の査読者には貴重なコメントを受けた。上記して感謝申し上げる。

文献及び注

- 1) 呉羽正昭. スキーリゾートの発展プロセス-日本とオーストリアの比較研究-, 二宮書店, 2017.
- 2) 呉羽正昭. 日本におけるスキー場の閉鎖・休業にみられる地域的傾向. スキー研究. 2014, 11(1), p.27-42.
- 3) 呉羽正昭. グローバル観光時代における日本のスキーリゾート (松村和則・石岡丈昇・村田周祐編, 「開発とスポーツ」の社会学: 開発主義を超えて). 南窓社, 2014, p.85-101.
- 4) 小室 譲. 長野県白馬村八方尾根スキー場周辺地域におけるインバウンドツーリズムの発展. 日本地理学会発表要旨集. 2014, 85, p.99.
- 5) 吉沢 直・渡邊 仁. インバウンド進展に伴う八方尾根スキー場周辺の地域変容-外国人所有の観光施設の変遷-. 日本スキー学会第28回大会講演論文集. 2018, p.27-30.
- 6) 名倉一希・甲斐宗一郎・小泉茜彩子・王 汝慈・呉羽正昭. 野沢温泉村におけるスキー観光の変容-インバウンド・ツーリズムの展開に注目して-. 地域研究年報. 2017, 39, p.65-89.
- 7) Vanat, L. 2018 International report on snow & mountain tourism: Overview of the key industry figures for ski resorts. 2018, <http://www.vanat.ch/RM-world-report-2018.pdf> (Cited 2018/07/13).
- 8) Agrawala, S. ed. Climate change in the European Alps: Adapting winter tourism and natural hazards management. OECD, 2007.
- 9) 呉羽正昭. オーストリアアルプスにおけるスキーリゾートの継続的発展. 地理空間. 2014, 7, p.149-168.
- 10) Falk, M. Gains from horizontal collaboration among ski areas. *Tourism Management*. 2017, 60, p.92-104.
- 11) Böhm, H. Das Paznauntal: die Bodennutzung eines alpinen Tales auf geländeklimatischer, agrarökologischer und sozialgeographischer Grundlage. Bundesforschungsanstalt für Landeskunde und Raumordnung (Bonn), 1970.
- 12) Tourismusverband Ischgl. 1929-2004: 75 Jahre Tourismusverband Ischgl, 75 Jahre Skischule Ischgl. 2004.
- 13) その日のスキーを終えたスキーヤーがスキーウェアのまま、またブーツを履いたまま飲食を楽しむことが、一般にフランス語でアプレスキー-après-ski (アフタースキー) と称される。長期滞在が卓越するヨーロッパアルプスのスキーリゾートでは、スキー以外の活動、とりわけ飲食施設での歓談が重視されている。そうした飲食施設はアプレスキー (施設) と呼ばれている。
- 14) ADAC. Ski Guide: die besten Skigebiete in Europa, 2018/19. ADAC-Verlag, 2018.
- 15) Parth, H. Fremdenverkehrszentrum Ischgl: eine Strukturanalyse. Diplomarbeit der Universität Innsbruck. 1979.
- 16) ただし、2018年2月現在では2軒の4星ホテルが整備を経て5星ホテルへと格上げされている。
- 17) Silvrettaseilbahn AG, Hrsg. Silvrettaseilbahn: 50 Jahre Silvrettaseilbahn AG. 2013.
- 18) Hoser, A. Eventtourismus, Praxisbeispiel: Internationaler Vergleich der Destinationen Ischgl (A) und Flims Laax Falera (CH) . Diplomarbeit der Universität Innsbruck. 1998.
- 19) Pillichshammer, K. Innovative Trends im Wintertourismus als klimainduzierter Anpassungsprozess am Beispiel von Ischgl und Maria Alm. Diplomarbeit der Universität Salzburg. 2009.
- 20) このアンケート調査はイシュゲル観光協会が2013年11月から2014年2月までに行ったものである。回答者数は3491人 (男性が58.8%) で、うち42.7%が35歳から49歳までの年齢層であった。ただし、イシュゲルもしくはパッツナウンターを訪問先に選んだ理由に関する有効回答数は3310である。国籍はドイツが73.0%, スイス7.6%, オーストリア5.8%, オランダ5.2%であり、オランダ人の割合が実際の宿泊数よりもやや少なくなっている。また回答者の63.0%がイシュゲルの宿泊施設に滞在しており、次いでカップル13.1%, ガルテュール11.7%であった。